

ここに、 こんなに かけがえのない 親と子の宝があります。

今、皆さんは、赤ちゃんや幼いひとと、にぎやかな日々をお過ごしのことでしょう。そして、皆さんは、お子さんが、心豊かに、できれば、思慮深く育ててほしいと、願っておられることと思います。なにかしら不安の多いこの社会を、人間らしく生きぬいてほしいとも。

でも、そのために何をすればよいのか…。世の中には、親の気持ちを急^せきたて、迷わす情報があふれ、そのなかで、皆さんはこの小冊子を開くことで、絵本というものに出会おうとしておられます。私たちは、皆さんの、この出会いを喜びとします。なぜなら、そこには、子どもの、人としての能力を育て、親と子を幸福と信頼で包む、いくつもの宝が埋もれているからです。

絵本には、魔法の力が
あります。

「親子で絵本を開いていると、ふし
ぎと穏やかな気持ちになります」

うに言われます。

「絵本を読んであげていると、子ども
もがいつそうかわいく思えます」
「絵本をとおして、子どもの成長を
感じられます」

私たちは、四十年にわたって子
どもと絵本にかかわり、その間、
多くの親の皆さんと出会ってきま
した。その方々が一様^{いちよう}に、このよ

絵本は、子どもにだけ恵みをも
たらすものではありません。子ども
と一緒に絵本を楽しむ大人へも、
同じくらしいの平安と幸福をもた
らします。これが、絵本の魔法の
力の意味です。



「あなたってほんとにしあわせね！」(童話館出版)

すぐれた絵本とは どんな絵本？

さて、その絵本が魔法の力を持つには、なにより、質の高いものであることが必要です。絵本であればなんでもよい、というわけではけつしてありません。

幼年期の子どもは、たいへんな勢いで成長しています。その成長の時に、できるだけ質の高い、すぐれたものを伝えたい。そのようなものが、子どもをよりいっそう豊かに育てる力に恵まれているからです。

このような恵みを持つ絵本が、ごく少ないのですが確かにあります。けれど、そのような絵本と巡り合うには、そのための眼力がんりきが必要でです。私たちは、専門的な立場でそのお手伝いを続けてきました。

では、すぐれた絵本とはどんな絵本のことでしょうか。それは、子どもに、どんな良いものをもたらしのでしょうか。絵本の三つの

要素——①絵 ②言葉 ③物語り——に沿って、簡単に述べてみます。

① 美しいものへの感性

子どもは絵本を読んでももらいながら、いっしんに絵を見ています。子どもにとって絵本の絵は、生まれて初めて出会う美術です。だからこそ絵本の絵は、子どもに見つめられるに足る美術であつてほしい。そうすることで、美しいものへの感性を育てたいと思います。この想いのもと、私たちは、絵本の絵を美術として展覧する場として、長崎市内に「祈りの丘絵本美術館」を運営しています。



② 言葉を育む

すぐれた絵本は、洗練された美しい日本語によつてつづられます。子どもは、未知の美しい日本語を、身近な大人の声で読まれる物語りの楽しさにのせて、身につけていくのです。絵本を読んでもらっている子どもの言葉の発達が早く、表現も豊かなのは、そのためです。

言葉は、考え、思い、学び、伝えるための手だてです。言葉が豊かになることは考えや思いが豊かになることです。それは、人が人らしく生き、社会のなかで、人とかかわりを持つて生きるうえで、とても大切なことです。

これほど大切な言葉の力は、乳幼児期の、大人からの語りかけや、絵本を読んでもあげるといふ、温かく、人間的なふれ合いをおしてこそ、より豊かに得られていくのです。

③ 子どもの真の姿を描く

絵本の①絵と②言葉によつてつづられるのは、③物語りです。その物語りが、真に子どもの心の世界と響き合っているかどうか、すぐれた絵本かそうでないかの、わかれめです。

でも、私たち大人は、そのような子どもの心から遠く離れてしましました。そこに、絵本を選ぶむずかしさがあります。

それに加えて、たとえば、三才と五才の心の成長には、ずいぶんと開きがあります。そうすると、すぐれた絵本であつても、その子の心の成長に應じていないと、ミスマッチということになりかねません。(それが、「童話館ぶつくくらぶ」のコース別編成に生かされています。) 私たちは、今を生きる子ども、心の深いところに寄り添い、よりよく生きようとする子どもの心を励ましていく、そんな絵本を手渡していきたいと願っています。

読み聞かせて開く 宝の箱

さて、子どもの心の成長に応じた、すぐれた絵本を手にしたとしても、それをそのまま子どもへ渡すのでは、せっかくの宝の箱は開きません。宝の箱を開けるには、特別な言葉が必要です。それは、絵本を読んであげる大人の言葉です。つまり、絵本とは、子どもが文字を読めるようになって自分で読む本ではなく、子どもに読んであげることで生命のかよう本です。では、特別な言葉によって開けられた箱に輝く宝のなかから、三つの宝をご紹介します。



—親の皆さん自身がつづる、
118編の絵本と子どもと家族の物語り。

① 子どもが本と仲良しになる

「うちの子は四年生ですが、本を読みません。(つまり、読めません。) どうしたらよいでしょうか?」

このことは、文字は読めても本が読めるわけではないことを示しています。本を読むということは、本の言葉を頭のなかで絵(イメージ)に描き、それを瞬間的に連続させていくことです。それなしに、人は本を読み進めることはできません。

絵本を読んでもらっている子どもは、目の前の絵本の絵は、物語りを追いかけるように変化していきます。まるで映画のフィルムのように、心のスクリーンに映しだしているのです。そうして、物語りを理解し、楽しみます。

この「眼に見えないもの(絵)を見る力(想像力)」こそが、今、絵本を楽しむ、将来、自分で本を読むために必要な力です。その力は、絵本を読んでもらうことによつて培われます。これは過保護でもな

んでもありません。子どもが、絵本や本と仲良しになっていくためのしぜんな道すじなのです。

② 生きることを語る

たとえば、およそ五才から七、八才という年齢は、子どもが自分をとおして人間を見つめ、また、社会との接点に立とうとする年齢でもあります。そんな彼らに、人生の先輩として、親として、語り伝えておきたいことは、さまざまあるように思います。それは、改めては口にしにくいけれど、人間として大切なこと——愛し、愛される、自分を見つめる、人間への洞察、正義と善、友情、一歩踏みだす勇氣、やさしさ、ユーモア、悲しみや喜びへの共感、支え合って生きる、自然、働くこと……

これらのことを語り伝えることで、彼らに、社会への道すじと人生への励ましを語ることができ、す。そして、もしかすると、この

ことが、子どもを育てるといふことの意味なのかもしれません。

けれど、あわただしい暮らしのなかで、そんなに大切なことであっても、子どもに直接語ることはできるものではありません。それに、どのように語ればよいのかもわかりません。そうなのです。そのためにこそ、人類は物語りを生みだし、物語りに託して語るべきことを語ろうとしてきました。その物語りが、現代では、絵本や本になっているのですね。

一方、この年齢の子どもたちは、自分で読める程度の絵本(本)からは、そのように深いものを読み取ることはできません。聞く、話す、読む、書く、という言葉の力なから、最も早くに発達するのは、聞く力です。子どもは、絵本を読んでもらえれば——つまり、聞くことができれば——ずいぶん深い内容を理解できますし、情感を深めていくことができます。

そうです。私たちは、そのような深さを持つ絵本(本)を選びだし、読んであげること、唯一、大人として語っておきたいと願うことを、自身の言葉で(物語りの言葉を借りて)子どもへ語るができます。

③ なにより、愛の表現です

子どもはお話が好き、絵本が好きです。それは、子どもには、絵本のもたらずものが、こよなく心地よく、同時に、絵本の持つ恵みが、自分が成長していくうえで欠かせないものと、本能的にわかっているからにちがいありません。

子どもに絵本を読んであげることは、さらに大きな恵みをもたらします。それは、絵本を読んでもらうことは、自分へ向けられる直接の愛の表現だと、子ども自身が知っているということです。その時間は、子どもにとって文字どおり、身体も心も抱きとめられ、あ

まえを受け入れられ、丸ごとの愛を感じていられる時間です。

絵本を読んでもらっている子どもの表情が穏やかで、言動にも落ちつきがあるのは、彼らが言葉の愛に満たされているからです。(本当は、これがいちばんの宝なのです。) 親と子であれ大人どうしであれ、言葉をとおして心の世界を共有できたと感じられるとき、人と人は深く結びつくのです。

このようにして、幼いころより、言葉をとおして、たましいの奥深くへ届く愛を存分に受けて育った子どもは、自分を愛し、自分と同じようにほかの人を愛し、信頼することができます。

また、そのようにして、折にふれ、人への愛と信頼を表すことのできる子ども、また、そのようにして成長してきた大人が、ほかの人から愛されない、信頼されないということがあるでしょうか。

今の子どもたちの苦しみの多くは、無償の、ただ温かく抱きとめられるだけの愛に満たされていないからだと思います。大人の気に入る「良い子」でいることで、その対価として愛情が与えられる、と子どもが感じているのだとしたら……。ここにも、社会的な現象や事件の背景があるように思います。

さりげなく素朴そぼに、絵本を読んでもあげる。ただ、それだけで、私たちは、子どもが切に望んでいるものを手渡すことができるのです。



心の土壌どじょうを耕すことから

親の皆さんから早期教育についておたずねを受けることがあります。「小学校へあがって人並みにやっつけていけるように」という気持ちは確かにそうですね。でも「早くに走りだせば、それだけ多くの実りが得られる」というほど、人間は単純にはできていないようです。

子どもの、人としてのしぜんな成長にそぐわない、強制的で非科学的な「教育」は、いずれ、歪ゆがみとなって、子ども自身に表れるおそれがあります。この年令の子どもは「お勉強」をする時期ではありません。そうではなくて、近い将来、勉強ができるようになるための土壌を、深く耕していく時期です。耕されていない大地に種をまいたところで、力強い苗が育つでしょうか。

子どもは今を生きる人です。今は存分に、子どもらしく生きることが、未来につながります。

真に学ぶ力を

絵本は楽しむものです。心を高く押しあげていくものです。そのことを忘れてはいけません。実は学びについても、結果として、いくつもの恵みをもたらします。

①言葉の力（豊かな語彙ごいを使って、考える、表現する。）

②言葉をつなげて新しいものを組み立てる力（思考力）

③お話を集中して聞く力（学校での学びはほとんど、先生の言葉を聞くことで成り立っています。）

④抽象的な思考力・想像力

⑤活字や本への親近感

⑥知的な好奇心／……………。

一年生の担任を経験してこられた、ベテランの小学校の先生の言葉です。「毎年、クラスにひとりくらいは、おうちで絵本をよく読んでもらってきただね、とわ

かる子がいます。教師の話をまるで吸い取るように聞いています。そんな子は、もともと絵本を読んでもらうようにして育てられていますから、大きな心配はありません」

本当に大切なものは、おのずと、あとからついてくるものです。そうやって身についたものこそ、真に力を持つのですね。

それでも、現在のように、子どもの周りに、子どもの関心こそそのものが多くあると、子どもと絵本を近づけるにも、工夫と動機づけが必要です。たとえば、私たちの「児童館ぶつくくらぶ」は、
①その子に合ったすぐれた絵本が
②毎月、継続的に、無理なく
③自分の名前の小包で 届きます。子どもは、小包を楽しみにするうちに、しぜんと中身の絵本も好きになっていくでしょう。

絵本のある子育てのご提案

これまで述べてきましたように、絵本は子どもに、人としての力と恵みをもたらします。そしてその副産物のようにして、親子の結びつきを深めていくのです。けれど、一方で、その結びつきを危あやうくするものも、家庭には存在します。

それは、テレビやスマートフォン、タブレットなどの電子メディアです。生活必需品として日常に浸透しているものでもあります。が、それでも、多くの時間を電子メディアが占めることは、子どもの言葉の発達を遅らせ、意欲や集中力や思考力など、人としての力を弱めていくばかりです。

意識して、電子メディアを遠ざけてみませんか。そのなかから、きつと、子どもとの過ごし方の新しい発見があると思います。おしゃべり、お絵描き、折り紙やあやと

りなどの種々の遊び、それに散歩やお手伝い…。

子どもとふれ合い、語らい、遊び、絵本を読んであげてください。そうすれば、何も心配することはありません。「児童館ぶつくくらぶ」で育った思春期・青年期の人たちが、自分の言葉で、そう語ってくれています。

すぐれた絵本の物語りには、先に生きた人々の、子育ての知恵が語りこまれています。絵本のある子育てをとおして、親だけの孤立した子育てから、多くの人々の経験や知恵とともにある子育てへと、提案したいと思います。

（おわり）